

国家はどこから来てどこへ行くのか

—P・ボビットに寄せて—

左 古 輝 人

1. 社会学と大局的歴史

数百年単位で歴史の趨勢を捉えて将来を展望し、広い意味での経緯のために提言をおこなうことは、オーギュスト・コント以来こんにちまで社会学の最重要の役割の1つであり続けてきた。それが社会学の歴史を貫く最も太いラインだったとさえ言えるかもしれない。

コントが人間集団と人間精神の3段階発展説を提唱し、家族制度の静的秩序と産業進歩の動的秩序の調和を説いたのに続き、19世紀後半にはハーバート・スペンサーの社会有機体進化論が現れ、軍事型から産業型への社会進歩を展望した。20世紀初頭にはマックス・ヴェーバーの合理化の歴史社会学が、西洋合理主義文明の前途に対する深刻な懸念を表明した。1950年代にはデイヴィッド・リースマンが、産業化の過程における人々の社会的性格の変遷に合わせ、基幹的な社会諸制度を改訂してゆくことの必要性を指摘した。社会主義が人類の望ましい未来としての威光を失った60年代にはマーシャル・マクルーハンのメディア史観が現れ、新たな体制批判と将来構想の拠り所を求める人々の注目を集めた。70年代、大衆的消費の確立と工業発展の物理的限界が強く意識されるようになった時期、ダニエル・ベルが脱工業社会論、知識産業論を提起したのも忘れられない。

こうして主要なものをざっと列挙してみただけでも、深い歴史的射程と将来展望を含むこれらの社会的歴史研究がいずれも、歴史哲学と実証史学のあいだにあって双方に刺激を与えただけでなく、研究者コミュニティの範囲を遥かに超えて多くの読者に親しまれ、各々の同時代とのあいだにさまざまな相互作用を巻き起してきたし、こんにちでも多様な関心から新しい含意が引き出され

ていることがわかるだろう。

1980年代以降、社会学におけるこうした良き伝統を継承する1つの動向として、ステート(国家)の歴史研究がある。20世紀の主要なステートは例外なく国民の物質的福祉の増進を図ることによって支配の正統性を保ってきたが、オイルショック以降、特に米英においてその基本路線に深刻な疑義が呈されるようになった。これに連動して米英の社会科学、歴史学ではステートの過去と現状の再精査、将来展望が新たに議論の俎上に乗った。このステート再考の動向はマイケル・マン(Mann 1986-1993:2002-2005)、ポール・ケネディ(Kennedy 1987=1993)、シーダ・スコチポル(Skocpol 1979=2001) (Skocpol 1995)などに代表される一連の壮大な社会学的ステート史の研究群へと結実している。

筆者が大学の学部生として社会学を学んだ80年代、日本の社会学者のあいだには、社会学は現代を扱うものであって、過去を扱う歴史学とは一線を画すべきだという考えが広く共有されていたように記憶する。また、社会学は事実の指摘と整理に徹すべきで、将来展望には慎重であるべきだという考えも多くの社会学者の支持するところだったように思う。しかし社会学の、間もなく200年になろうとする蓄積の全体からすると、80年代日本におけるかような自己制約はかなり特異な一過性の現象だったと言うほかない。

80年代の日本は幸か不幸か、オイルショックも円高不況も、工業の省資源化・生産コスト削減と本格的な大衆的消費の展開というもっぱら経済的な努力によって成功裏に乗り切り得てしまった。ジャパン・アズ・ナンバーワンのユーフォリアのなかでは、自らの歴史に対する顧慮や将来への展望など関心を抱きようがなかった。当時の日本にとってはサッチャリズムもレーガノミックスも本質的には対岸の火事であって、せいぜい安全保障と国際収支に悪影響が出ないよう留意しておくべき動向にすぎず、米英アカデミズムにおけるステート再考の問題意識など深刻に受け止めようがなかった。当時の日本の社会学者の慎ましやかな自己制約にも無理からぬところがあったわけである。

しかし90年代以降はバブル崩壊、安全保障環境の激変、財政赤字の深刻化、人口の高齢化などが一気に押し寄せたことが作用したのだろう、日本でも議論の風向きは変わった。さきに挙げたような米英の社会学的ステート史研究の日

本語訳がずいぶん進んだ。近代日本におけるネーションステート形成を主要な課題とする〈歴史社会学〉という立場が少なからぬ社会学者の自称するところになり、大方の関心を引くようにもなった。日本の社会学者たちが近代米英の政治哲学を本格的に精査するようになったのもこの頃からだ(それまでは明らかに独仏偏重だった)。80年代日本の社会学の状況を肌で知る筆者にとってはたいへん感慨深い。リ

フィリップ・ボビットの『アキレウスの楯』(Bobbitt 2002)と『恐怖と合意』(Bobbitt 2008)は、80年代以降の社会学的ステート史研究の動向のなかに位置づけることができる、近年の興味深い業績である。『アキレウスの楯』は15世紀末から現代にいたるステートの生成と変遷の大勢を描き、その未来像の概要にまで考察を及ぼした900ページを越える大著である。『恐怖と合意』は前作の方法と認識に基づき、経緯のための現状診断と処方箋をまとめた提言書である。

ちょうどアメリカ同時多発テロ事件とそれ以降の混迷の渦中で、まさにその混迷そのものを主題としたためだろう、これら2著の有する意義を評定する作業はまだ緒についてさえいない。ボビット自身が民主・共和両政権のブレイントラストの一員として長らく政権の意思決定に参加してきたことも、この著作への学問的論評を敬遠させる一因だろう。しかし一連の〈対テロ戦争〉を主導してきたブッシュ政権が任期を終え、人々の関心が軍事・外交における緊張から経済・労働における緊張へと急激に移りつつあるこんにち、そろそろこの労作を2000年代における社会学的歴史研究の1つとして検討に付しておくべき時期である。

2. ボビットのステート史の骨格と特徴

ボビットによれば、ステートは15世紀末から16世紀初頭のイタリアを端緒として形成され、本質的には変わらずこんにちまでドミナントなものとして継承されていると考えられる、支配の原型的なパターンである。総じて支配は戦勝に向け暴力の独占を志向するが、そのなかでステートの特徴は支配諸制度が特定の支配者人格から自律して存続する、統合された体制をなすとみなされる点で

ある。

ステートの主導的な体制形式(constitutional form)は、16世紀の〈君権ステート(princely state)〉から1600年に前後する約100年間における〈王権ステート(kingly state)〉へ、18世紀の〈領域ステート(territorial state)〉へ、19世紀の〈ステートネーション(state-nation)〉へ、20世紀の〈ネーションステート(nation-state)〉へと変遷してきた。そして現在、21世紀の主導的な体制形式になりゆくものと目される〈市場ステート(market-state)〉が生み出されつつある。

ステートのこうした変遷過程は、むろん実際にはきわめて複雑で多様かつ偶発的な出来事の積み重ねなのだが、戦略、法、歴史という3要素の諸関係として要約可能である。これら3要素の最も理解しやすい関係の仕方を範型的に示せば次のようである。軍事的脅威に対するステートの諸反応すなわち諸戦略のうち、実際に成功を取めた戦略がステートの対内・対外諸関係のあり方を不可逆なまでに変容させる場合がある。法がこの不可逆な変容を定着させ、法の正統性を保障すべく歴史が書き直され、新しい歴史が広く信認され信憑されるに至ると1つの体制形式が確立される(Bobbitt 2002:5-17)。

戦略、法、歴史という3要素がたがいに関係する仕方は様々あり得る。法の変容が新たな戦略に道を拓くこともあるだろうし、新たに信認されるようになった歴史が戦略の改訂を求めることもあるだろう。いずれにせよ3要素の関係は〈メカニズム〉といった喩えが適切になるほどの確固とした関係様式としてよりは、あまりに複雑な現実の過程をせめて理解可能な程度に整理するための、観察者にとっての方便として捉えられるべきだ。

この点に関してあらかじめ若干説明しておくが、ボビットが、ステートの誕生からこんにちまでの500年をみる限り、体制形式の変化が必ず〈画期的戦争(epochal war)〉のなかで引き起こされてきたことを強調するのに対して、読者は注意する必要がある。これは、ボビットが、法と歴史に比べて戦略の変化がステートに与える影響の大きさを偏重していることを必ずしも意味しない。〈画期的戦争〉も観察者の視点からする整理のための便宜的な概念なのである。

たとえばこんにち私たちが〈三十年戦争〉や〈スペイン継承戦争〉、〈ナポ

レオン戦争〉などという名称で呼び、ポピットが〈画期的戦争〉と呼んでいるものは、現実にはかなり雑多な軍事主体たちの、意図も一貫性も疑わしい断続的な諸戦闘の羅列だった。それら諸戦闘を相互に関係づけ、あたかも一体の〈画期的戦争〉であったかのように要約するのは、それらを事後的に振り返り意義づけようとする私たちなのである。²⁾ どうやら歴史とはそのように書かれ、ものによっては次第に信認を得、信憑され、しまいには言及もされず疑われもしなくなり、私たちの自己理解の一般的な前提与件のレベルにまで沈潜してゆくものようである。

要するにポピットにおける〈画期的戦争〉の重視は、軍事偏重のように見えて、実際には歴史偏重なのである。このことを了解したうえでなら次のように言ってよかろう。ポピットとともにステートの歴史を考えるにあたっては、〈画期的戦争〉への勝利に向けてステートがいかに戦略を改訂し、法と歴史を変容させてきたかに特に注目すべきである。

ポピットのステート史の特徴として際立っているのは次の3点である。

- 1) ステートを15世紀に生成して以来、現代まで継承されている支配の原型的なパタンとして理解すること。
- 2) 18世紀に結晶化した〈領域ステート〉と20世紀に結晶化した〈ネーションステート〉とのあいだに、19世紀の〈ステートネーション〉の範型を置くこと。
- 3) 〈ネーションステート〉以降を、単に〈ネーションステート〉の解体としたり、いわんや〈ステートの解体〉としたりせず、もう1つの、別の特徴をもつステートへの変化として捉えようとする事。

第2点と第3点についてはのちに触れることとして、ここではまず第1点について説明しよう。

20世紀の社会科学のなかで、ステートという語の扱いかたはおおむね次の4通りだったと言える。

- 1) 日常語に準じる。アナキーとの対比における支配の存立をすべてステートと呼ぶ。

- 2) 学統の違いに応じて多様に定義する。より狭く、例えば〈支配諸制度が、それを担う特定の支配者人格から自律した段階における支配体制〉(Skinner 1989)や、〈暴力の独占を要求する共同体〉(Weber 1919=1980)などをステートと呼ぶ。80年代以降の社会学的ステート史研究は、総じて、3)に傾きすぎた研究に、もう一度この立場の成果を導入し直した。
- 3) 社会科学的新術語を設定する。上述のような混乱を払拭できないステートという語を放棄して、〈政治システム〉などのニュートラルなラベルを作る(Easton 1971=1976)。
- 4) 概念史的に扱う。テキストのなかで「ステート」と書かれたものを、とにかくそのままステートとして扱う(Skinner 1989) (Bartelson 2001=2006) (左古 2008) (左古2009a)。

イーストン流に上位概念を新たに設定する3)の語用法は、用語の混乱に直面した社会学者として最も適切な対処のように思われるかもしれないのだが、ステートという語が歴史的に担い、こんにちも担い続けている決定的な役割を見えにくくするのが難点である。のちに説明するが、1)のように現代の日常語においてステートがひどく広く希釈された意味を持ったり、2)のように多様な学統が思い思いに特殊な意味を込めようとしたりすることは、〈間違い〉として排除したり非難したりすべきことではなく、すぐれて制度的な事実であるところのステートの本質について何事か重大なことを示唆しているのである。

このことを思考可能にするのが4)の、スキナーや筆者のような概念史的アプローチ、つまりステートという語が多様なコンテキストのなかで持たされてきた意味の諸変化を実証的に追跡する立場である。そもそもステートという語がはっきりと支配を指して用いられるようになるのは15世紀末のことである。そこでステートと呼ばれた、新たに生み出されつつあった支配の決定的な特質は、こんにちから振り返ってみると〈支配諸制度がそれを担う人格から自律した、一体的に統合された支配体制として表象される〉ようになったという点にあったことがわかる。

ポビットがステート史を15世紀末から説き起こすのは、明らかに4)の概念史的アプローチを重視してのことである。ポビットのこうした概念史重視の姿

勢は、ポピットを、80年代以降のステート史研究の動向のなかで際立たせている。しかし〈君権ステート〉や〈ステートネーション〉、〈市場ステート〉というふうに体制形式のラベルを独特な仕方でも自由に合成する態度に現れているように、彼は必ずしもテキストの字面に拘泥するテキスト厳格派ではない。肝要なのは、当事者たちには必ずしも明確には気づかれなかっただろうが、こんにちから見ると分かる重大な諸変化を際立たせることである。〈支配諸制度がそれを担う人格から自律したものとして表象される〉ようになった、という15世紀末の大事件を際立たせるには、4)のような概念史的アプローチによってステートという語の当時の用法に注目するのが効果的だし、それ以降の諸ステートの内的変化やステート間の変化を明確化するには、2)のような伝統的アプローチと3)のような社会科学的アプローチを調和させることによって造語するのが有効だ。

3. ステートの生成から18世紀まで

ステートというタームが支配体制を指して用いられるようになる以前、戦勝に向け暴力の独占を志向する支配が、特定の人格としての支配者——王(king)、第一人者(prince, principal)、皇帝(emperor)など——なしにそれ自体として自律的に存立しているとは解されていなかった。特定の支配者の死は、その人格を中心・頂点とする支配体制の消滅と同義だった。

15世紀以前にもステートというタームが支配諸関係にかかわる言論のなかで用いられていなかったわけではない。ステートというタームは、遅くとも9世紀には支配諸関係をめぐる言論のなかで用いられていた。しかしその時点におけるステートは単に‘status regni (state of the realm)’つまり〈特定の支配者による支配の現況・状態〉、或いは‘status principis (state of the prince, state of the principal)’つまり〈特定の支配者の地位・立場〉、あるいはこれら両方を未分化のまま指し示していたにすぎなかった(左古2008)(左古2009a)。

ステートがまだ政治的言論の周縁にあって何ら重要な含意ももたなかった中世、欧州中部には、政治的権威による局地的で序列的な秩序に、宗教的権威による超地域的で水平的な秩序が覆いかぶさった二重構造があった。ただ、政

治的秩序が局地的であったとは言っても、その支配権の継承の根拠は地域性の共有ではなく血縁の継承にあったし、その序列関係は本質的には二者間の約束を超えた効力を持つものではなかった。³⁾ 宗教的秩序は、政治的支配に正統性を賦与し、また、政治的諸権威が互いに紛争を起こしたばあいに依拠すべき上級権威として機能した。宗教的権威は政治的秩序のなかでも有力だったし、世俗的支配が必要とした読み書き職能者を提供できたのも専ら彼らだった。

この中世的秩序のあり方を根本的に変化させ、〈支配者から自律して存続する、統合された支配体制〉としてのステートの生成への引き金を引くこととなったのは、ポピットによれば、1494年フランス軍のイタリア侵攻、および、それに対するイタリア自治都市群の反応だった。フランス軍が導入した軽量で機動性に富むブロンズ大砲は、もっぱら徒歩で侵入する敵を想定して高さばかりを追求したナポリの城壁を一瞬にして時代遅れにした。この事件によって自身の戦略的脆弱性を否認なしに意識させられたイタリア自治都市たちは、16世紀、自らを守るため新しい戦略を摸索した。人口規模が小さく市民兵に期待できなかった彼らは、自らの経済力を利用することに活路を見出した。大規模な傭兵隊を編成し、砲撃に耐える城壁を建設するため、彼らは膨大な資金と物資を継続的に調達するための徴税制度をかつてなく整備した。これがのちの永続的な官僚機構の先駆的な事例となった。

この過程で、特定人格としての支配者と支配体制を区別し、後者を前者から自律した人格的実体とみなす思考法が形成された。戦略的脅威に対処するため、時として傭兵隊長が自治都市の実権を掌握したが、彼らが公式に支配者の地位に就こうとする際、従来のような宗教的・道徳的権威から正統性を調達することは当然難しい。そこで持ち出されたのが〈ステート(支配の現況・状態)〉だった。宗教的・道徳的に好ましくない支配者であっても、〈ステート(支配の現況・状態)〉の維持に資するということ自体が、支配権の継承や支配者の行動の正統性の根拠とされるようになったのだった。

この結果、〈支配の現況・状態〉にすぎなかった‘*stato del regno (state of the realm)*’は、戦略的な意図に基づき強力に統制された自治都市の統合された状況を意味するようになっていった。‘*Ragione di stato (reason of state)*’は、支

配者が宗教的・道徳的に好ましくない行動をする際の正統性根拠としての、ステートの戦略的な事情を意味するようになった。

君権ステートは、*ragione di stato*を基準として、君主自身のおこないを合理化することを可能にする。君主は単に彼自身のために行動しているのではなく、ステートへの奉仕として行為すべく強制されてもいる。ステートという語それ自体が、この時期、「事物の状態(*state of affairs*)」を意味したラテン語の語源から、組織(*institutionalize*)された「状況(*situation*)」としての国家(*the State*)へと変容したことを見よ。

(Bobbitt 2002:87)

かくして16世紀に勃興した最初期のステートに、ボビットは〈君権ステート〉というラベルを与える。以後、〈君権ステート〉の支配パターンは欧州各地に伝播し、16世紀半ばまでにはイングランド、スペイン、スウェーデン、フランスなどの体制が同様の性質を持つものへと変容した。

〈君権ステート〉の生成にやや遅れて、16世紀後半からはもう1つ別の体制形式が出現し、際立った発展的变化を遂げる。それが〈王権ステート〉である。

〈王権ステート〉とは、スペイン軍の戦略的脅威に直面したネーデルラント軍がオランダ独立戦争(八十年戦争、1568-1648)において採用し成功したカウンターマーチ戦術を発端として形成された中央集権的なステートである。カウンターマーチは高度な習熟を要する。敵に対して横一列に並んだ火縄銃の傭兵隊を三層に配置する。最前列が一斉射撃ののち反転後進して最後列に回り、次の射撃に向け準備をおこなう。この戦術を成功させるには、戦時だけでなく平時にも組織的な反復訓練をおこなう必要があった。これがのちの大規模な常備軍の先駆となった。

諸役割を分担した傭兵たちを、唯一の統率者の号令によって複雑に動かす〈王権ステート〉は、主権(*souveraineté, sovereignty*)の観念を発達させた。16世紀半ばから17世紀前半にかけて、この発展の主要な舞台となったのはフランスとスウェーデンだった。従来、権力は支配者をはじめ貴族や聖職者、豪商などがそれぞれの程度に保有するものと観念されていたが、このとき発達した

のは、主権はほかの諸権力とは程度においてではなく性質において根本的に異なる——それは単なる臣従契約ではなくステート統治権である——という考え方だった。これに伴い、ステート理性の質も変容した。16世紀イタリア〈君権ステート〉における‘ragione di stato’が、本質的に、ステートの戦略的緊急事態に対処するために支配者が必要とする場当たりの狭知であったのに対して、17世紀フランス〈王権ステート〉における‘raison d'état’は、ステートのより積極的かつ恒常的な運営指針としての、いわゆる〈国益〉を意味するようになる(Bobbitt 2002:108)。

三十年戦争(1618-1648)の終結にあたって交わされたウェストファリア条約(1648)は、欧州の国際社会(society)をこうした〈王権ステート〉の烏合として表象し、各々のステートを超える上級権威を必要としない新しい国際秩序を、主権相互不可侵の原則のみを基礎として定義した。ここにおいて、キリスト教は支配と支配諸体制間関係に対して維持してきた自らの旧来の役割を決定的に喪失した(Bobbitt 2002:508)。

〈領域ステート〉の兆候は三十年戦争においてすでに見える。特定の支配の及ぶ空間的範囲を明確化しようとする傾向は、この時期、複数のステートが軍事的に対峙する境界地域に居住していた人々の切実な要求に淵源する。ウェストファリア後も欧州では、再び戦禍に見舞われることへの懸念から、軍事的庇護を求める膨大な移民が発生した(Bobbitt 2002:118-119)。

〈領域ステート〉のはっきりした萌芽が確認できるのは、アウグスブルク同盟戦争(1688-97)下のイングランドとオランダにおいてである。当時両国がステートの領域確定に格別神経を尖らせるようになった最大の理由は、両国がフランス〈王権ステート〉の戦略的脅威に対抗するにあたって、海上貿易からあがる税収に活路を見出したことだった。税収を確保するために境界を明確にし、人員と物資の出入りを正確に探知する必要があったわけである。

〈領域ステート〉は、17世紀末以降、火打石銃が火縄銃に取って代わり、その一斉射撃の威力が顕著に向上するのにもない本格的な発達局面に入った。三十年戦争の記憶がまだ生々しい時期である、武力は限定的な目標に向けて慎重に行使しないと結果を全く制御できなくなるという懸念が共有された。

そうした条件下で戦われたスペイン継承戦争(1701-1713)は、特定の領域内の人的物的金銭的資源を、領域拡張のために限定的かつ効率的に動員するイングランドおよびプロイセンの〈領域ステート〉の顕著な成功とともに終結した。

ここでは‘reason of state’、‘Staatsraison’は政治算術(political arithmetic)、内政術(Polizeiwissenschaft)によって探究され、統計的に表現される国益、国力およびそれを向上させる諸技術としての意味を得、‘sovereignty’、‘Souveränität’はステートの法的な意味における排他的統治権のみならず、ステート領域の経済的統制力・統制権をも指すようになり、かつその及ぶ空間的範囲は複数ステート間における相互承認を通して決するべきものと観念されるようになったのだった(Bobbitt 2002:135-36)。

スペイン継承戦争の終結にあたって結ばれたユトレヒト条約(1713)は、領域に対するステートの法的および経済的主権の正統性を、ウェストファリア以上に相互承認論的に基礎づけ、以降フランス大革命にいたるまでの欧州における〈キャビネット戦争〉の作法を規定した(Bobbitt 2002:129-130)。

4. ステートネーションとネーションステート、市場ステート

〈ステートネーション〉は、大革命からナポレオン戦争(1789-1815)にかけてのフランスに形成・確立された体制形式である。〈領域ステート〉が主導権を握った18世紀欧州の狭隘な秩序空間を、普遍主義的な理念に基づき徴兵された国民軍によって圧倒した点で〈領域ステート〉から区別される。ステートに対するネーションの献身的奉仕を要求する一方で、未だネーションの物質的福祉と敵性ネーションの絶滅を明確な戦略目標に据えていない点で〈ネーションステート〉から区別される。

欧州におけるいわゆるナショナリズムの勃興は、通説的にはフランス革命とその周辺諸国への影響とともに18世紀末から19世紀前半に求められるものだし、こんにちのステート史の議論においても、たとえばマンは19世紀前半の特にイングランドにおける、基盤構造整備(infrastructure)へのステート関与の拡大深化と労働者階級の形成にネーションステートの重要契機を認めている(Mann 1993=2005)。しかしボビットによれば、フランス革命およびそれを契機とする

一連の出来事は、人間の連帯に対する新しい普遍主義的な構想に裏打ちされていた限りにおいて〈ネーションステート〉——その個別主義的で内向きな連帯の企図——とは異なる。19世紀前半におけるステートの基盤構造整備への関与は前世紀の〈領域ステート〉の滑らかな延長線上にあるにすぎない。

ネーションステートは相対的に新しい構造である。そればかりか、ステートそのものが15世紀末あたりに起源を持つ、文明世界の暮らしにおける実に最近の産物なのである。
(Bobbitt 2002:214)

1980年に前後して開始されたステート史再検討の動向のなかには、ネーションステートが自明化した状況に対する批判を専らの眼目とする研究も数多く存在した。そうであるだけに、ネーションステートとステートの区別すらしない、見方によっては粗雑な議論が繁茂し、結果的にネーションステートがあたかもきわめて強固で普遍的な支配形式であるかのような誤ったイメージが独り歩きすることになった。ポビットの〈領域ステート〉論と〈ステートネーション〉論にはそうした謬見を解毒する効能がある。

〈ネーションステート〉という体制形式は、アメリカ内乱(南北戦争、1861-65)を契機として米国に、普仏戦争(1870-71)を契機としてドイツに先駆を見る。ステートが社会保障へと大規模に関与するようになった最初期の事例の1つは、アメリカ内乱を戦った旧北軍の退役軍人に対する、米国政府による年金の給付だった。20世紀前半におけるような総力戦(全面戦争、total war)の最初の自覚的な着想は、鉄道、通信網などの基盤構造をはじめ国内に存在する多様な資源を戦争のために素早く動員するすべを平時から準備し、普仏戦争に勝利したドイツにあった。

社会保障・総力戦体制の整備によって、敵性ネーションの根絶を目指して史上類例のない大規模な戦闘を長期にわたって継続できるようになった〈ネーションステート〉は、〈長い戦争〉(1914-1990)の下で成熟し、戦前の日独に例をみるような全体主義的ネーションステート〉、米英におけるようなクリベラル議会主義的ネーションステート〉、ソ連邦をはじめとする〈共産主義的ネーションステート〉という3つの形態に結晶化した。文字通りの総力戦は第2次大戦(1939-1945)以降、大量破壊兵器の発達の結果実行不能となったが、

〈ネーションステート〉の3類型のあいだの緊張が解かれることはなかった。

以上、16世紀から20世紀まで、〈君権ステート〉から〈ネーションステート〉までの経緯を概観した。ここで確認しておきたいポイントは2つである。

- 1) 各時代における主導的な体制形式の形成は、必ずしも戦略、法、歴史という3要素のうち、戦略の変化をことさら重要な端緒としてきたわけではない。

確かにイタリア〈君権ステート〉とフランス〈王権ステート〉、イングランド〈領域ステート〉は、各々の戦略的脅威への対処を発端として形成されたと言えるだろう。しかしフランス〈ステートネーション〉の形成は明らかに異なって、歴史の変化を端緒としている。まず歴史の変容（啓蒙主義的で進歩主義的な歴史観）によって法原理が変動（普遍主義的で共和主義的な支配原理）し、フランス大革命が生起し、新たな支配正統性原理に基づいて戦略（散弾銃を担いだ国民皆兵軍）が組織され、一群の戦闘（のちに〈ナポレオン戦争〉と呼ばれることになる〈画期的戦争〉）が行なわれたのだった。

アメリカ〈ネーションステート〉の端緒には、支配の正統性をめぐる本質的に法的な内部闘争があった。それが戦略的緊張を高め内戦を招来した。南北戦争が結果的に一種の総力戦になったとは言えても、それは決して普仏戦争におけるドイツの戦略のように——あるいはフランスの脅威に晒された16世紀前半イタリアの戦略のように——自覚的・作為的なものだったとは言にくい。

- 2) 主導的な体制形式の変遷は、必ずしも加算的な発展の過程ではない。この過程をざっと振り返ると、16世紀〈君権ステート〉におけるステートの自律化、17世紀〈王権ステート〉におけるその集権化、18世紀〈領域ステート〉におけるその厳密化、19世紀〈ステートネーション〉におけるその空間的拡張、20世紀〈ネーションステート〉におけるその富裕化というふうにも見える。ポビット自身が描く図表(Bobbitt 2002:346-47)など眺めていると特にそう見えてくる。

しかし要注意である。ここでわれわれが受け取るべきは、現存するステートがこれら3形式を経て現在に至ったということではない。体制形式の主要な発展の舞台がイタリアからフランス、そして英独へ、と移っていることを考慮すれば直ちに理解できるが、ボビットが言う体制形式は、各々の時代における際立った発展的变化の結果生じた支配体制の様式であって、それ以上でも以下でもない。複数の体制形式のあいだに不用意に単純な関係様式を読み込むべきでない。

以上の2点を確認しておけば、次の議論に触れた読者が抱きかねない無用な疑念のかなりの部分が予防できるだろう。

ボビットによれば、1970年代末以降〈共産主義的ネーションステート〉のみならず〈リベラル議会主義的ネーションステート〉においても、社会保障と物質的福祉の増進が限界を迎えた。この困難な状況下、サッチャー政権下の英国、レーガン政権下の米国において模索が始まり、こんにちに至るまでその影響を強め続けている、おそらく21世紀に主導的となるであろう体制形式が〈市場ステート〉である。その特徴は、個人の属性——エスニシティ、性別、信仰、国籍など——にかかわらず、居住者(citizen)の経済的機会に着眼し、過去のステートの役割の多くを民間へ委譲し、人々の暮らしに対する議会の影響力を弱めながら、多様な脅威——軍事攻撃、犯罪、災害、環境危機など——を専らリスクの観点から評価し統制することにある(Bobbitt 2008:85-124)。

ボビットの描く20世紀までのステート史を、加算的な成長過程のように見誤ったまま〈市場ステート〉論に触れてしまったならば、人はこの新しいステート体制形式の除算的な性格に違和感を覚えることになっただろう。また、このステート史をもっぱら戦争決定論的な説として捉え、〈王権ステート〉は〈君権ステート〉を打倒し、〈領域ステート〉は〈ステートネーション〉により克服されたのに、〈市場ステート〉は〈ネーションステート〉との戦いに勝利していないではないか、といった的外れな批判に囚われることになったかも知れない。

本稿の読者はそのような誤解とは無縁だろう。しかしそれでも、ボビットの〈市場ステート〉論は、現代米国の保守的リパタリアンの最小国家論の引き写

しに過ぎないのではないかという疑いは拭えないかもしれない。

ボビットはレーガン以降の最小国家論を確かに踏まえている。しかしそれを単純に追認しているわけではない。そのことは〈市場ステート〉の下位類型に関する彼の驚くべき主張を見れば分かる。〈市場ステート〉には、大別して〈合意の市場ステート(market-state of consent)〉と〈恐怖の市場ステート(market-state of terror)〉がある。前者は、目下G7諸国が80年代以降の米英をモデルとして推進している自己変革の過程の延長線上に形成されるであろう〈市場ステート〉である。後者は、前者と同じ条件下で生み出された双子であるが、前者に敵意を剥き出す、アルカイダをはじめとするいわゆるテロリストネットワークである。

ネーションステートから市場ステートへの移行の前衛には2つの合意のステート——米国とEU——が…ある。恐怖のステートもいくつかの形式で現れつつある。その幾つかはアルカイダのヴァーチャル統治(virtual caliphate)のような市場ステートだろう…。 (Bobbitt 2008:182)
この指摘は気宇壮大な思想家にありがちな妄念として片づけるべきものではない。

まず、現代のテロリストネットワークは明らかに戦勝、暴力独占を志向しているのだから、そのおこないは支配と呼ばれ得る。支配体制が支配者人格から自律したものとして観念されていることがステートをそれ以外の支配の諸パターンから区別するのであってみれば、テロリストネットワークもステートである。それは個人の属性に無関心で、〈合意の市場ステート〉居住者の経済的機会に着眼する——経済的機会の持つ意味を知っており、それに打撃を与えることを主要な戦術とする——のだから〈市場ステート〉の一種である。〈ネーションステート〉などの、旧来のステート体制諸形式の遺産を継承しないだけに純度の高い〈市場ステート〉だとすら言えるかも知れない。

5. ステートの全域化

ボビットの〈恐怖の市場ステート〉論の第2の含意はある意味もっと重大であって、ボビットの考察それ自体というよりも、それを受け止め、議論を深め

てゆくために私たちがとり得る1つの方向に関わる。

ニクラス・ルーマンを援用するまでもなく(Luhmann 1980-1995)(馬場 1986)(高橋 2002)、自然というカオスのみならず、自らの同類との交渉のカオスのなかに何とかして首尾一貫した原理を見出したいくなってしまふのは、どうやら人間なるものにとってなかなか抑制できない性向であるらしく、先人たちは——私たち自身も——飽くことなくその探究に取り組んできた。ポビットの〈恐怖の市場ステート〉論が気付かせてくれるのは、そのハイパーモダンな性格からすると一見逆説的なようだが、ステートがその黎明期において獲得し、現代に至るも失っていない、我々の性向に適合した原理としての力である。

指摘してきたように、通常、ステートの概念史は、ステートというタームの近代的な意味を〈支配者から自律して存続する、統合された支配体制〉に求め、その完成を16世紀に求める。しかしステートの概念史の最も重大な局面はおそらく17世紀、〈ナチュラルステート(natural state, state of nature)〉と〈シヴィルステート〉という言論上の分節化の導入がなされたところにあったと思われる。

多くの論者と異なり、スキナーとその支持者たちは、ステート概念史に17世紀ホブズの言論が果たした役割をたいへん重視し、そこにおいてこそステートの近代的な意味が確定したことを主張している(Skinner 1989:90-91)。スキナーによれば、ホブズをはじめイングランドの専制論者たちは、人民主権論者たちから自らを区別するためにコモンウェルスやリパブリックという語彙を意図的に避け、支配者人格からだけでなく支配対象としての人民とも一致しない自律的な実体としての支配体制を指すためにステートというタームを用いた。ここにステートの近代的な意味は確立されたのだ、と(Skinner 1989:112)。スキナーの見解は半ば正しく、半ば間違っている。ホブズを重視した点は正しいが、ホブズの重要性は、彼における専制主義ではなく、〈ナチュラルステート〉の確立にある。

《現代のテロリストネットワークは〈市場ステート〉の一種だ》とのポビットの指摘を聞いて、私たちが違和感を覚える小さからぬ原因の1つと思われるのは、ここでのステートを無意識のうちに〈国家〉に変換して理解する癖が染

みついていることである。私たちは17世紀欧州のいわゆる国家契約説における〈ナチュラルステート〉をもっぱら〈自然状態〉と解し、〈シヴィルステート〉を〈国家〉と解してあまり不思議に思わない。しかし〈ナチュラルステート〉は〈自然状態〉であるだけでなく〈自然国家〉でもあり、〈シヴィルステート〉は〈国家〉であるだけでなく〈市民状態〉でもあるのだ。17世紀、ステート概念はこの操作を経て、支配諸関係に関するあらゆる事柄を包摂し媒介する地位に立った。⁴⁾

幼稚な言葉のトリックを弄しているのではない。支配諸関係に単一の原理を見出そうとする17世紀の知的性向が〈シヴィルステート〉との対概念として措定した〈ナチュラルステート〉は、単にステート以外の支配諸関係の断片全てを詰め込むことのできる残基^{レジデュ}であり続けはしなかったのである。ホブズが、そのように措定したつमりの〈ナチュラルステート〉のカオスのなかに〈獲得によるコモンウェルス〉という一種の支配体制を発見したこと、そして翻って複数の〈シヴィルステート〉のあいだにもう一度、〈ナチュラルステート〉を〈支配諸体制間の闘争〉として発見し直したことを見よ。

新たに想起した支配諸体制間〈ナチュラルステート〉のカオスをさらに何らかの支配体制として発見し直すと、その残余がさらに見い出され、云々…と、このサイクルはいったん始まると際限なくあらゆる事象をステートへと巻き込んでゆく。こんにち私たちが〈市場ステート〉の概念を立て、そこからの残余カテゴリーを措定すると、間もなくそのなかに〈恐怖の市場ステート〉を発見するのは、本質的にはこれの現代における反復なのである。

この点に関連して、マンのステート概念が啓発的である。マンにしたがえばステートとは実際にはかなりの程度に自律的な諸力（政治的、軍事的、経済的、イデオロギー的な諸力）の、まとまりを欠いた共存であるに過ぎないのだが、それらが何らかの観点や用途から、その都度統合された一体としてステートの形姿を得るのである。

今日のアメリカ国家(the American state)は、ある週には中絶の権利を規制しようとして保守的一家父長的—キリスト教的に結晶化し、翌週には銀行のスキャンダルを規制しようとして資本主義的に結晶化し、その翌週

には…外国に軍隊を派遣することで超大国として結晶化をとげるのである。
(Mann 1993:736=2005:369)

言わば、統合された一体としてのステートの存在を保障するステート理性は、その都度その場で生成する。ちょうどニクソンショック以降、紙幣の信用が、それが交換されるその都度その場で生成するのと同じように、何らかの課題に対処しなければならないとき、こんにち私たちの性向はステートが〈ある〉ことからステートを探し始め、間もなくステートを然るべきものとして見出す。

このステートをリヴァイアサンと呼ばずして何と呼ぼうか。支配諸関係のいかなる萌芽も想像力もその内部に吸引し、すべてを封じ込めて逃がさないかのようなこのリヴァイアサンのしなやかさと強靭さは、それが17世紀以降、体制形式の修正を幾度か繰り返し、発展的変化の舞台を変え、主権やステート理性の意味内容に訂正を強いられながらも、無数の革命や戦争や恐慌を乗り越えて、こんにちまで500年の長きに渡って持ちこたえてきたという圧倒的な実績が証明している。

私たちは今後おそらく、かつてない体制形式を経験することになるのだろう。そして、私たちはかなり高い確率でそれをステートと呼ぶだろう。

6. 概念史のための覚書

近世以降ステートに起ったのに類することは、ソサイエティをはじめ少なからぬ他のタームにも起ったと思われる(左古2008)(左古2009a)ので、最後に、この〈全域化〉とその再生産の過程において重要と思われる諸要因を、若干の抽象を施しつつ列挙しておこう。

- 1) 原理の措定。旧来の原理に適合しない出来事が夥しくなり、原理が首肯性を喪失するにつれ、それらを統合できる別の原理の存在が、特定のタームによって、多分に暗示的に措定されてゆく。
- 2) 内容の描きこみ。原理の存在が暗に措定されるのではなく、その内容がステート理性や主権(者)のようにポジティブに描きこまれる。人々がこれを使いこなすだけの洗練された技能を身につけると、その都度必要なだけ描きこめば済むようにさえなる。

- 3) 脱歴史化、通歴史化あるいは超歴史化。新タームによる新原理は一定の首肯性を持つようになると、自らを普遍的な実体として表現するようになる。その結果、〈古代ギリシャのステート〉とかく古代日本の律令ステート〉といった語用法が可能になる。
- 4) 反対物の取り込み、或いは反対物とのあいだの差異の模倣化。〈ステート〉に対する〈ナチュラルステート〉のように、〈ソサイエティ〉に対する〈ザ・ソーシャル〉のように。
- 5) 沈潜。タームが言論において表立って用いられなくなることには対極的な2つの意味があり得る。第1に〈それが重要な意義を失った〉ということ、第2に〈それが議論の余地なきほどに受け入れられた〉ということである。研究のうえでは最も取扱いに注意を要する要因であろう。

註

- 1) 社会学は草創期からこんにちまで〈社会の自己観察〉であり続けているが、社会学がそのことの持つ意味に自ら強い関心を示すようになったのは1970年代以降である。この時期、社会学の社会学をはじめ、〈リフレクシビリティ〉といったキーワードを用いる社会の2次的観察——〈社会の観察の観察〉——が本格化した。近年の社会学は、言わば社会の3次的観察——〈社会の観察の観察の観察〉——を始めているようにも思われるが、それが、従来の1次的、2次的観察がもつばら理論的な言語で事態を捉えていたのと異なり、歴史的な言語によって考察を成り立たせようとしていることは興味深い。

1980年代以降のニクラス・ルーマンが〈ゼマンティックの歴史〉に注力することになったのはこの意味で偶然とは思えない。日本では、諸大学で教えられてきた社会学が社会なるものをどのように主題化してきたのか、その主題化の様式がいかに変遷してきたのかを、講義要綱の体系的な収集・分析によって明らかにしようとする試みが、現在おこなわれている(那須 2008)(関水・飯田 2008)。

- 2) まさか三十年戦争を戦った当事者たちが、それが三十年戦争だと知っていたはずがない。ステート概念の形成以降こんにちまで、三十年戦争に限らず、ある一群の諸戦闘を、他の諸戦闘と区別しつつ1つのラベルによって束ねることは、しばしば、戦時と戦後を明瞭に隔て、戦後の国内・国際秩序を正当化する企図に基づいて為される。
- 3) 例えばB氏がA氏に臣従し、C氏がB氏に臣従していることは、C氏がA氏に臣従していることを直ちには意味しなかった。
- 4) バーテルソンはステートのこうした性質を「虚焦点(foci imaginary, virtual focus)」(Bartelson 2001=2006:289)に譬えている。

参考文献

- 馬場靖雄、1986、「歴史化されたシステム理論：N・ルーマンの全体的理解のために」、『ソシオロジ』31(2)、3-19頁。
- Bartelson, Jens, 2001=2006, *The Critique of State*, Cambridge University Press. (=小田川大典・乙部延剛・五野井郁夫・青木裕子・金山準(訳)『国家論のクリティック』岩波書店。)
- Bobbitt, Philip, 2002, *The Shield of Achilles: War, Peace, and the Course of History*, Knopf.
- Bobbitt, 2008, *Terror and Consent: The Wars for the Twenty-first Century*, Knopf.
- Easton, David, 1971=1976, *The Political System: An Inquiry into the State of Political Science*, Knopf. (=山川雄巳(訳)『政治体系：政治学の状態への探求』ペリカン社。)
- Hobbes, Thomas, 1651=1968, *Leviathan*, Crawford B. Macpherson (ed.), Penguin Books.
- Kennedy, Paul, 1987=1993, *The Rise and Fall of the Great Powers: Economic Change and Military Conflict from 1500 to 2000*, Vintage Books. (=鈴木主税(訳)『決定版 大国の興亡：1500年から2000年までの経済の変遷と軍事闘争』上下巻、草思社。)
- Luhmann, Niklas, 1980-1995, *Gesellschaftsstruktur und Semantik: Studien zur Wissenssoziologie der modernen Gesellschaft*, 3 Bds, Suhrkamp.
- Mann, Michael, 1986-1993=2002-2005, *The Sources of Social Power*, 3 vols, Cambridge University Press. (=森本醇・君塚直隆(訳)『ソーシャルパワー：社会的な“力”の世界歴史』全3巻、NTT出版。)
- 左古輝人、2008、「社会概念の再検討：近年の動向と展開へのてがかり」、『人文学報』392、131-153頁。
- 左古、2009a、「国家と社会の概念系譜学的素描」、佐藤成基編『ナショナリズムとトランスナショナリズム』、法政大学出版局、53-72頁。
- Skinner, Quentin, 1989, “The State”, Russell L. Hanson (et.al. eds.), *Political Innovation and Conceptual Change*, Cambridge University Press, pp.90-131.
- Skocpol, Theda, 1979=2001, *States and Social Revolutions: A Comparative Analysis of France, Russia, and China*, Cambridge University Press. (=牟田和恵・大川清文・中里英樹・田野大輔(訳)『現代社会革命論：比較歴史社会学の理論と方法』岩波書店。)
- Skocpol, 1992, *Protecting Soldiers and Mothers: The Political Origins of Social Policy in the United States*, Belknap Press.
- 関水徹平・飯田卓、2008、「講義要綱(シラバス)にみる学知の変遷(3)：社会学教育における「社会」を主題化するあり方の変容」、第81回日本社会学会大会(於東北大学)、一般報告。
- 高橋徹、2002、『意味の歴史社会学：ルーマンの近代ゼマンティック論』、世界思想社。

The State: Its Past and Future

Teruhito SAKO

Doctor of Sociology

Assistant Professor

Tokyo Metropolitan University

From Auguste Comte onward, sociology has been a science to diagnose the contemporary human condition with long-term historical perspective. This paper clarifies the nature and the future of the modern State system, with reference to Philip Bobbitt's recent study on the history of the State that seems best represent the sociological spirit today. As Bobbitt says, the State -a permanent infrastructure that is represented as an entity autonomous from the ruler as a person-- is a political creation since the end of the 15th century. The main source of state's power is not just physical, but also metaphysical, as its existence depends on people's belief in its unity (sovereignty) and rationality (reason of state). Although its volatility, the State system survived for these 500 years, and still strong enough. This mystery of the State will be unraveled by articulating the similarity between Thomas Hobbes's conception of 'natural state' and Bobbitt's conception of 'market-state of terror' .